日本建築学会中国支部研究報告集 第34巻
平成23年3月

民家を活用した通所介護施設「田中さん家」の使われ方
－山口県阿武町における高齢者福祉施設のネットワーク構築に関する研究　その４－

正会員　○三島　幸子*
正会員　中園　眞人**
正会員　山本　幸子***

地域福祉施設　高齢者デイサービス　既存民家
改修　使われ方

1. はじめに

本報では、広域基幹施設と利用圏が重複している、民家を活用した「田中さん家」を対象に、使われ方調査結果を元に活動プログラムと活動場面の分析を行い、民家型小規模介護施設としての使われ方の特徴を明らかにする。

調査内容は平面図の作成、活動場面記録調査である。平面図は実測調査を行い、家具配置も記録している。活動場面記録調査は平成 21 年 11 月 2 日―11 月 7 日の 6 日間、施設内を終日（午前 9 時から午後 4 時）5 分間間隔で利用者及びスタッフの行動観察を行い、行為内容及び行為場所を平面図上に記録した。図 1 に平面図を示す。

２．施設の空間構成

改修は手すりの設置のみで、それ以外は既存のまま利用している。台所は食事サービスに使用され、食卓を置き食堂とし、昼食やおやつの時間に使用されており、また事務スペースとしても使用されている。静養室はスタッフの控室として使用されている。

6 畳和室は機能訓練室１で、食堂に全員座れないため昼食やおやつの時間に使用され、体操の場としても使用されている。8 畳、4 畳和室の続き間は機能訓練室 2，3 で、常にふすまは開いており、利用者とスタッフの居間とし、体操の場となることもある。機能訓練室 2 に続く縁側には机とソファが置かれ、床座といす座が選べるようにしている。機能訓練室３はベッドが置かれ、利用者が自由に昼寝等を行える部屋である。

建物の正面玄関は道に面しており、車が止められないことや裏側に駐車場があることから、台所側の裏口をそのまま施設の出入り口として使用している。

2 階は別の人が借りて毎週土曜日に子供の英語塾として使用されている。

３．１日の生活プログラム

調査期間中の 1 日の生活プログラムを図２に示す。1 日の生活プログラムは大きく、(1)8:30～9:00：送迎（迎え）(2)9:30～10:00：バイタルチェック･お茶（3）10：00～12：00：自由時間１(4)12:00～12:30：昼食(5)13:00～14:40：自由時間２(6)14:00～14:30：入浴（7）14：40～15：10：体操(8)15:10～15:30：おやつ(9)15:30～：送迎

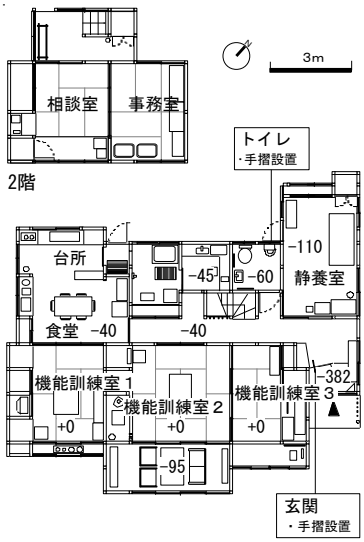

図１　平面図

写真１　「田中さん家」

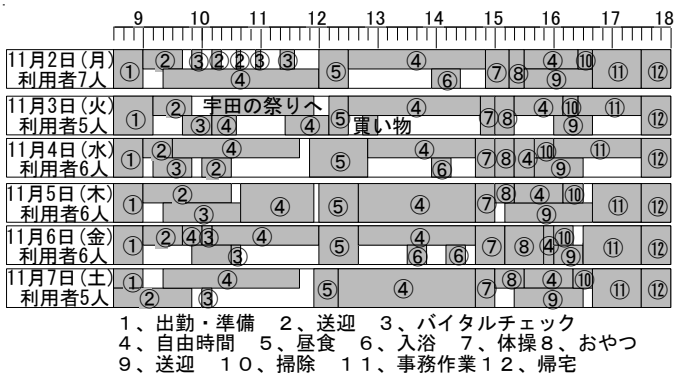

図２　プログラム

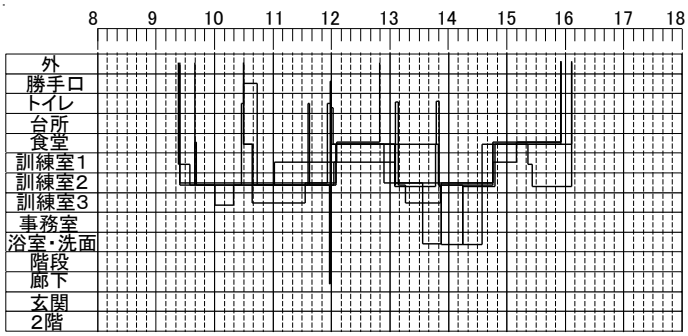

図３　利用者居場所（11 月 6 日）

The Usage of the Renovation of the Traditional Wooden House for the Welfare Facility ‘*TANAKASAN-CHI*’
Network Construction of Welfare Facilities for Old People in Abu Town Yamaguchi Prefecture (Part 4)

MISHIMA Sachiko, NAKAZONO Mahito, YAMAMOTO Sachiko

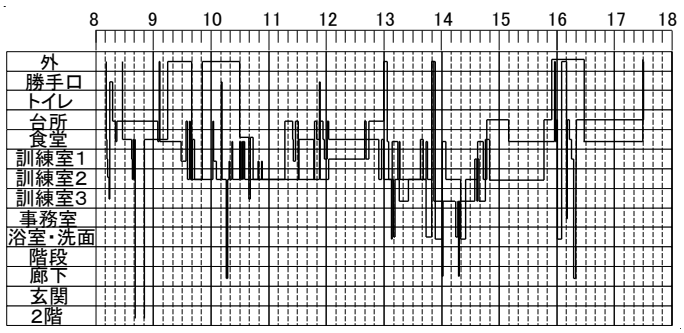

図４　スタッフの居場所（11 月 6 日）

図５　利用者の居場所と行為（午前）

(送り)に区分される。

食事、体操、おやつを食堂と機能訓練室 1 で行い、自由時間は機能訓練室 2，3 で過ごし、部屋をプログラムに応じて使い分けている。また、中心市街地に位置するため、近くに駅や病院やスーパーマーケットがあり便が良く、気軽に利用できる。

また、この施設の特徴は介護度の低い利用者が多く、入浴サービスを利用する利用者が少ないことである。

利用者の居場所の一例を図 3 に示すが、利用者は昼食の時間は食堂、それ以外の自由時間は機能訓練室１または機能訓練室 2 で過ごし、トイレや浴室以外の居室移動は少なく、機能訓練室が 1 日の生活拠点となっている。一方、午後から買い物に出かける利用者や、昼食後帰宅する利用者も見られた。

スタッフの居場所の一例を図４に示すが、1 人のスタッフは午前中昼食の準備のため台所にいる。他のスタッフは利用者と一緒に機能訓練室 2，3 で過ごしている。午後も入浴担当スタッフ以外は機能訓練室 2，3 で自由時間を

図６　利用者の居場所と行為（午後）

過ごし、体操、おやつの時間に食堂に移動し、利用者の様子を見ている。

４．利用者の行動パターン

１）送迎（迎え）、バイタルチェック

送迎は 1 人のスタッフが数回に分けて行っている。もう 1 人のスタッフは待機して飲み物の準備をしている。利用者が到着すると、裏口を施設の入り口に使っているため狭く、待機しているスタッフは車のところまで迎えに行き、入り口で段差があるため介助し、好きな場所に座らせて飲み物を出している。

バイタルチェックはスタッフが座っている高齢者を順番に回って行っている。その間利用者はお茶を飲みながらくつろいでいる。

2）自由時間 1

特にプログラムは組まれていないので、利用者は他の利用者と話をしたり、マッサージ器具でマッサージをしたりして過ごしている。スタッフもそばに付いており、様子を見ながら一緒に過ごしている。スタッフは利用者に体調のことだけでなく、日常生活の話などをして、利用者と話をしている。

3）昼食

昼食の時間になるとスタッフが利用者を呼びに行き、食堂と機能訓練室 1 で 2 つの机に分かれて、「いただきます」の合図で食べ始める。昼食時の席はスタッフが決めている。スタッフはそれぞれの机に付いて同じものを食べている。

4）自由時間 2、入浴

ほとんどの利用者が食べ終わっても、スタッフはしばらく利用者とお話している。その後スタッフは食器を片づけはじめる。1 人のスタッフは利用者を歯磨きへ誘導している。1 人の利用者が食器を拭くのを手伝っている姿もあった。これは食堂と台所が近く、盛り付けなどが可能な設備やスペースが確保されている点が作用している。他の利用者は歯磨きが終わると、機能訓練室 2、3 でマッサージをしたり寝たりして過ごしている。スタッフも入浴や片づけが終わると機能訓練室に行き、利用者の話に参加している。

スタッフはお風呂の準備が出来ると、1 人ずつ入浴する利用者を浴室へ誘導する。入浴前にトイレに行く利用者も数人いる。大半の利用者は介護度が低いため、スタッフが入浴まで介護することはほとんどない。利用者がお風呂から出るとすぐ次の利用者を浴室へ誘導する。もう 1 人のスタッフは入浴が終わった利用者に飲み物を渡している。

5）体操、おやつ

スタッフは体操の時間になると利用者に呼びかけて機能訓練室 1 に誘導して体操が始まる。体操は座ったままで行い、スタッフが見本を見せて説明しながら行っている。食堂と機能訓練室は一続きになっているため、一体化して利用できる。そのため、床に座るのが難しい人は食堂のいすに座って体操をしている。体操が終わるとスタッフが歌詞の書かれたプリントが配って歌を歌うこともある。その間、他のスタッフはおやつの準備をしながら利用者の様子を見ている。

終わると、スタッフはおやつの準備をし始め、利用者は準備が出来ると昼食時のように 2 つの部屋に分かれておやつを食べ始める。スタッフも一緒に食べている。

図７　非日常プログラム

6）送迎（送り）

帰りも 1 人のスタッフが数回に分けて送迎するため、スタッフは帰る人から順番に玄関に誘導する。入り口が狭いので、1 人ずつゆっくりと車まで誘導している。他の利用者はくつろいで待っている。他のスタッフは待っている利用者とお話したり片づけを始めたりしている。

５．非日常プログラム

11 月 3 日には宇田でお祭りがあったため出かけている。強制ではないが、この日は利用者全員がお祭りに行っている。利用者に合わせて 30 分時間をずらして、2 回に分けて連れて行っている。帰りも 2 回に分けて連れて帰っている。

この施設の利用者は入浴サービスを利用する人はもともと少ないが、1 人も入浴サービスを利用しない日もある。11 月 5 日は入浴サービスを利用する人がいなかったので、スタッフも午後は利用者とお話ししたり、添い寝をしたり、折り紙をしたりして過ごしている。

また、毎週土曜日には別の人が借りており、2 階で子供の英語塾が行われている。利用者は子供と接することなくいつも通りのプログラムで過ごしている。

６．まとめ

本報では街なかの伝統民家を再生した小規模福祉施設を対象に、施設の空間構成と使われ方の特徴について検討した。得られた知見は以下の通りである。

１）プログラムが少なく、昼食、体操、おやつ以外の時間は自由時間になっている。その間利用者はお話したりのんびりしたり、それぞれ自分のしたいことをしている。同じ地域の民家を活用しているため、利用者は家にいる感覚で過ごすことができる。スタッフは最低 1 人常に利用者のそばにいて、利用者の様子を見ている。利用者が自発的に行動できるようにしていることは評価できる。

２）介護度が低いこともあり、入浴サービスを利用する人は少なく 1 人もいない日もある。入浴サービスを利用する利用者も介助が必要ない人がほとんどなので、スタッフは浴室まで誘導するだけである。その分、スタッフは声掛けだけでなく、日常生活の話をしたりして、利用者とお話をしたりしている。

３）この施設では自由時間と昼食などプログラムに応じて部屋を使い分けることができている。この民家では続き間座敷が独立しており、部屋の使い分けが容易だったことが考えられる。そのため、利用者は昼食の準備や片づけなど、スタッフの邪魔になることなく過ごせる点で評価できる。また、１日の生活の中で場の移動により気分転換が図れるとともに、短距離ではあるがリハビリ効果も期待される。

４）基本段差は少ないが、駐車の関係で民家の裏口を施設の入り口として使用しており、狭く少し奥まったところにあるため、スタッフは車と入り口の間を１人ずつゆっくり誘導している。入り口も大きな段差があり、出入りしにくい点は課題である。

５）中心市街地に立地しているため、近くに病院やスーパーマーケットがあり便がよく、気軽に利用しやすく、また自由時間に利用者同士で買い物などに出かけることができる点は評価できる。

７．３施設の比較

その 2 では「清ヶ浜デイサービスセンター」、その 3 では「えんがわ」、その 4 では「田中さん家」を対象に使われ方の特徴について検討した。3 つの施設を比較して得られた知見は以下の通りである。

１）「清ヶ浜デイサービスセンター」では設備が整っており、車いすの利用者でも一般浴室に入浴できることや、介護度が高く自力で動くことのできない利用者に対しても、特別浴室で対応できる点で評価できる。また、静養室にベッドが 5 つあるため、寝たい利用者にいつでも対応できることや、看護師がいるため、リハビリができたり、利用者の体調が悪くなっても対応できたりすることから、介護度の高い人でも安心して利用できる点で評価できる。

２）「えんがわ」と「田中さん家」は「清ヶ浜デイサービスセンター」と比べて設備は整っていないが、同じ地域の民家を活用しているため、利用者は家にいる感覚で気軽に利用できる点で評価できる。特に「田中さん家」は利便性の高い中心市街地にあるため、自由時間に利用者同士で買い物に出かけることができる点も評価できる。

３）「田中さん家」と特に「えんがわ」は古い民家を使用していることもあるが、家の中を移動する際に段差が多い。特に玄関や浴室は既存のものをそのまま使用しているため段差があり、スタッフの介助が必要になる点は課題である。

４）「田中さん家」ではプログラムによって部屋を使い分けているため、利用者は気分転換もでき、スタッフの邪魔になることなく過ごすことができている点で評価できる。一方で、「えんがわ」では全てのプログラムを暖房効率の関係から同じ部屋で行っている。そのため、スタッフはプログラムに応じて机と椅子の移動が必要となっている点で課題になっている。「清ヶ浜デイサービスセンター」でもほとんどのプログラムが同じ部屋で行われているが、空間が広いため、机の移動はほぼない。

謝辞

本研究を進めるにあたり、「田中さん家」スタッフの方々、利用者の方々には、度重なる調査にご協力いただいた。また調査には千原真理･森川瑞季両氏(卒論生)の協力を得た。末尾ながら記して謝意を表します。

参考文献

１）山田あすか･佐藤栄治:小規模高齢者介護施設の運営様態と介護ニーズの地域差に関する研究,日本建築学会計画系論文集, Vol.73, No.633, pp.2355-2363,2008

２）北澤大祐他２名:地域資産との連携からみた高齢者介護施設の運営特性に関する研究, 日本建築学会計画系論文集, No.602, pp.81-88,2006

３）中園眞人, 山本幸子：農家住宅を再利用した地域共生ホーム「中村さん家」の使われ方－総合・循環型福祉サービス推進モデル事業の事例研究－, 日本建築学会計画系論文集, NO.651, pp.1199-1206, 2010.5

４）中園眞人, 山本幸子, 加登田恵子：街なかの伝統民家を再利用した地域福祉施設「さんコープ河村邸」の使われ方－定期借家方式による民家再生システムに関する研究－, 日本建築学会計画系論文集, NO.652, pp.1581-1588, 2010.6

５）中園真人, 山本幸子, 村上和司, 加登田恵子：民間団体による既存建築を再利用した地域福祉施設整備と運営形態－総合・循環型福祉サービス推進モデル事業の事例研究－, 日本建築学会計画系論文集, NO.624, pp407-414, 2008.2

* 山口大学工学部感性デザイン工学科　学部生
** 山口大学大学院理工学研究科　教授・工博
*** 山口大学大学院理工学研究科　助教・博士（工学）

* Undergraduate, Dep. of KANSEI Design Eng., Faculty of Eng., Yamaguchi Univ.
** Professor, Yamaguchi Univ., Dr.Eng
*** Assistant Professors, Yamaguchi Univ., Dr.Eng.